

写真のマテリアリティ

—現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論—

Materiality of Photographs

—Lessons to Recapture Colonial Heritages in Contemporary South Korea—

太田 心平

OTA Shimpei

要 旨

これまで社会文化人類学の研究において写真は、民族誌を書くための資料か、民族誌に掲示するイラストの一部としか考えられてこなかった。写真自体を研究対象にしようとする研究も存在したが、それらは撮影の時期や場所や経緯、つまり写真が生産された状況を議論の的とするもので、つまるところ民族誌を書くための資料だったといつてよい。特に、植民地写真という物体について、あるいは韓国・朝鮮研究という研究枠においては、この傾向が顕著である。

これに対し本稿は、植民地期の朝鮮で撮られた写真を題材にすえ、近年の社会文化人類学の潮流を導入することで、これまでとは別の見地を展開しようとする。まず、近年の韓国（ソウル^{インサドン}仁寺洞）において、植民地期朝鮮やその後の韓国国内で撮影されたガラス乾板が、どのように商人に取引され、個人にコレクションされているのかを、聴き取り調査の結果から描き出す。そのうえで、議論の第1の段階として、「モノの生産について論じることは、そのモノを消費することである」という考え方をうち立てる。そのうえで第2の段階では、植民地期の朝鮮で撮られた写真が、現代韓国においては消費物となるだけでなく、逆に人びとを創るエージェンシーになっているとすることを示していく。ただし、物体のエージェンシーについて先行研究を追従するようなそうした議論が、本稿のもとになった調査研究ではスムーズに進まなかった。この点を、第3の段階で整理する。

社会文化人類学のなかでもこうしたマテリアリティの概念が導入されてこなかった写真研究や韓国・朝鮮研究に、こうしてそれを導入しようということは、本稿だけで果たしきれるような課題ではない。しかし本稿は、上記の三段階をもって、ひとつの試論となりえるだろう。

【キーワード】 韓国・朝鮮、ガラス乾板、消費文化、エージェンシー、オントロジー

1. はじめに

写真というものは、撮影されればそれで終わりなのだろうか。

これまで社会文化人類学の研究において写真は、民族誌を書くための資料か、民族誌に掲示する

イラストの一部としか考えられてこなかった (Morphy & Banks 1997: 7)。写真自体を研究対象にしようとする研究も存在したが、それらは撮影の時期や場所や経緯、つまり写真が生産された状況を議論の的とするもので、つまるところ民族誌を書くための資料だったとあってよい。特に、植民地写真という物体について、あるいは韓国・朝鮮研究という研究枠においては、この傾向が顕著である。

これに対し本稿は、植民地期の朝鮮で撮られた写真を題材にすえ、社会文化人類学の過去 25 年の潮流を導入することで、これまでとは別の見地を展開しようとする。第 1 の段階として、「モノの生産について論じることは、そのモノを消費することである」という考え方をうち立てる。そのうえで第 2 の段階では、植民地期の朝鮮で撮られた写真が、現代韓国においては消費物となるだけでなく、逆に人びとを創るエージェンシーになっているということを示していく。ただし、物体のエージェンシーについて先行研究を追従するようなそうした議論が、本稿のもとになった調査研究ではスムーズに進まなかった。この点を、第 3 の段階で整理する。

社会文化人類学のなかでもこうしたマテリアリティの概念が導入されてこなかった写真研究や韓国・朝鮮研究に、こうしてそれを導入しようということは、本稿だけで果たしきれるような課題ではない。しかし本稿は、上記の三段階をもって、ひとつの試論となりえるだろう。

2. 太和楼事件

2001 年 12 月 20 日から翌年 5 月 26 日まで、韓国のソウル大学の冠岳キャンパスにあるソウル大学博物館で、意義ぶかい特別展がおこなわれた。「暮らしの証の写真——ガラス乾板写真特別展」と題されたこの特別展では、同大学で保管されている大量のガラス乾板の写像が展示された。

1,300 点以上にもおよぶとされるそれらのガラス乾板は、この種の研究史料にありがちな例のとおり、研究機関の倉庫で突然「発見」されたものである。説明書きも、まったくと言っていいほど添えられていなかった。このため当初は、誰が、いつ、どこで、何のために撮った写真なのか、来歴を知る糸口すらなかった。ただ、被写体の内容からして、20 世紀前半におこなわれた民俗調査に関する写真であることだけは、万人の目に明らかだった。こうした事情により、同大学では人類学科の研究者たちがチームを組み、これらの究明を目指した調査研究にあたることとなった⁽¹⁾。

調査研究の過程で、研究チームはそれまで各自で練磨してきた学識を用いつつ、新しい努力も重ねていった。しかし、この調査研究に大きな成果をもたらしたのは、それだけではない。研究チームは、偶然による幸運にも恵まれたのである。

第 1 に、資料群に含まれている風景写真のうち一部 (e.g. 写真 1) には、あるメンバーの慣れ親しんだ風景が写っていた。「私が小さいころにみた景色なんです」という証言が、研究チームのなかから得られた。これにより、幾枚かの写真が、そのメンバーの出身地である蔚山^{ウルサン}の、太和楼^{テファル}という在来建造物を写したものであることが判明した。

第 2 に、かねてより植民地期の朝鮮で活動した人類学者たちに関する学史研究を重ねていた研究メンバーが、写真群のなかに複数の日本人研究者を発見したのである。同大学が発足する以前、同じ場所に存在した京城帝国大学の研究者たち、たとえば植民地期朝鮮で秋葉隆 (1888-1954) を写したものが、複数みとめられた。こうして、これらの写真群の少なくとも一部は、秋葉らの朝鮮民俗に関する調査行を記録したものであり、その撮影時期は秋葉が朝鮮に赴任した 1926 年以降の撮影であることが分かった。

だが、こうした幸運は、小さな事件の発端ともなってしまった。「ソウル大でみつかったガラス



写真1 ソウル大学博物館所蔵のガラス乾板写真（中心奥が太和楼）

乾板は、「京城帝大の日本人研究者による1930年代の民俗調査の遺物」という話が、日韓を中心として研究者たちのあいだに広まったのだ。一度にみつかったからといって、これらの写真群がすべて同じ時期に同じ人物によって同じ目的で撮られたとは限らない。このため、上記の2つの発見をもって、このように断定することは出来ない。にもかかわらず、この話は研究者たちのネットワークのなかで真実味を帯びて広まり、太和楼が写るあの数枚の写真も「京城帝大の日本人研究者による1930年代の民俗調査の遺物」ということになってしまった⁽²⁾。

この曖昧な根拠にもとづく断言には、やがて警鐘が鳴らされた。太和楼という建造物自体の歴史をひもといた第三者が、これらの写真は1930年代に撮られたわけがないことを証明してみせようとしたのである（申衡錫^{シンヒョンソク} 2010：89-91）。この新説で論拠とされていることを、以下に紹介しよう。太和楼は、1907年から蔚山公立普通学校の正門として使われることとなり、数年のうちに大幅な補強改築がおこなわれた。1917年に刊行された『蔚山案内』という冊子に掲載されている写真を見ても、すでに近代建築の要素を取り入れ、「蔚山公立普通学校」の表札を掲げている太和楼の外観を確認することが出来る。これ以降に太和楼を写した写真には、かならずこの改築された姿が映し出されている。一方、ソウル大学所蔵のガラス乾板にみられる太和楼は、よくみると学校の表札が写っているものの、すべて改築前の姿だ。よって、1907年から1917年のあいだに写されたということになる。1926年に朝鮮へ赴任した秋葉隆はもちろん、1924年に設置された京城帝国大学の人間が、これらの撮影に関わったということなど、むしろきわめて考えにくい話だといえる。

筆者も、以上の新説に、より信憑性をみる。また、新説の優位を補足できる証拠として示せるものが、筆者には他にもある。神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵している写真資料だ。このなかには、近代日本の実業家で人類学者でもあった澁澤敬三（1896-1963）とその同人たちが、北東アジアの各地で撮影したフィルム写真群がある。その通称「アチック写真」には、1933年から1936年のあいだに蔚山で撮影されたと推察されるものも、少なからず含まれている⁽³⁾。太和楼こそ写っていないものの、同じ蔚山の市街地で撮影された写真があり、当時の蔚山市街地の様相を生き生きと伝えている。何枚かのなかには、西洋風の麦わら帽子、洋傘、自転車、ガラス窓、電信柱、日本式の看板といった、近代の開国以降に韓国・朝鮮へもたらされた外来的な物体も写し込まれてい



写真2 神奈川大学日本常民文化研究所所蔵のフィルム写真「蔚山洋靴店前で布を売る人々」(宮本馨太郎 撮影、目録番号：ア-61-14)



写真3 神奈川大学日本常民文化研究所所蔵のフィルム写真「街中で布を売る人々」(宮本馨太郎 撮影、目録番号：ア-61-015)

る (e.g. 写真2; 写真3)。ここで、ために写真1と、写真2および写真3をとり、両者を見比べていただきたい。どうだろうか。上記の新説が依拠するような特定の建造物に関する専門的な史料探求や歴史知識を経なくとも、これらが同じ時期に同じ街で撮られた写真だとは、誰にとっても考えられないのではないだろうか。

3. レッスン1——生産と消費の実在論的關係

過去に人間社会で起きた出来事は、追実験が不可能で、かつ観察や参与も不能である。現在の研究者が史料を解釈するということも、想定される無限の可能性、無数の蓋然性のなかから、もっとも妥当なものを、厳選して提示することである。よって、太和楼の写真がいつ誰によって撮影されたのかについても、旧説と新説のどちらが絶対的に正しいかを断言することなど出来ないし、第3、第4の新たな解釈も今後唱えられるかもしれない。このように、写真の生産について研究することは、史学的な困難と闘うことを意味する。

かつ、こうした研究者の解釈には、現在の研究者の人格 (person) が影響をおよぼす。本稿で述べてきた事例を例にとって説明するならば、チームに属する個々の研究者たちは、韓国人のひとり、しかも最高学府であるソウル大学の研究者として、韓国社会に植民地期の遺物を

解釈することとなる。こうしたとき彼／彼女らは、韓国社会が彼／彼女らに期待している役割と、彼／彼女ら自身が韓国社会のなかで果たそうとしている役割から自由ではありえない。もちろん、彼／彼女らのなかには、社会と距離をおいた形で個人的な自己 (self) が、別に存在しえるだろう。しかし、研究チームの一員として韓国社会に発信すべき彼／彼女らの記述や語りには、自己主張より、社会的な人格が現われざるをえない⁽⁴⁾。人格と自己とが、他者との対話をとおして調和し、その個人に独特なアイデンティティ (identity) として自己と他者とのあいだに承認されることもある。だが、そのアイデンティティもまた、自己そのものではありえず、社会的な人格と無関

係ではない（太田 2002）。

この事情により、ソウル大学の研究チームの人びとは、以下のように主張することとなる。なお、これらは、2つの点に注目して、読み進められたい。それぞれの引用文で述べられていることが前半と後半で異なっているという点と、両方の前半どうしと後半どうしが同じことを述べているという点である。

日帝の朝鮮植民統治期、朝鮮の社会と文化について多くの調査事業がおこなわれた。この諸事業は、植民統治を円滑におこなうための基礎資料を確保するためという、具体的な目的で進められたものであるが、他方では当時の韓国社会の文化を記録した貴重な資料群である。大部分の調査資料が文章記録として残されているが、散見される写真資料は当時の民俗を生々しく読み取ることが出来る資料であり、研究者たちに当時の社会文化現象をより実感的に接することが出来る良い機会を提供している（李文雄^{イムヌン} 2008：1）

ソウル大学博物館所蔵のガラス乾板は、日帝強占期（「日本植民地期」ということばの、韓国におけるナショナリスティックな表現——引用註）の所産であり、日本が朝鮮の社会文化的、および経済的状况をより正確に把握し、さらにいえば朝鮮人たちを日本の植民地主義に飼いならすことを目的として、生産されたものと思われる。（中略）制作者たちは、植民地主義的な意図のもとで対象を選び、これについて写真によるディスコースを創りだした。だが、これとは関係なく、その時代についての客観的な情報を得ることが、これらからは出来る（姜正遠^{カンチヨンウォン} 2008：14-20）

彼らは、これらの文章に続いて、発見されたガラス乾板写真の生産について論じようとしている。だが、その議論をはじめめるためには、まず必要な過程があるのだということが、上記からはみてとれる。写真たちと向き合う自分たちが、反植民地主義者やナショナリストの人格をもっていることを明らかにしておかねばならないのである。議論の対象となる写真たちは、誰が、いつ、どんな目的で撮影したものか、いまだ明らかでないため、それが植民地主義や反韓国的なものであるとは、まったく限らないはずなのに、だ。彼らの研究者としての一面と、旧大日本帝国にまつわる所業に関して彼らが韓国社会にみせ、韓国社会から求められる社会的な人格とは別だと、これらの文章は伝えている。日本で一般的に「反日感情」と呼び慣わされる北東アジアのこうした現象は、高次に社会的なレベルで造成され、個人の言動を規定するものである。そして、こうした現象は、そこにまつわる個人の自己とは、直接の関係がない。また、人間の認識と評価と感情が現出するのは、社会的な枠組みのなかでのことである。こうした彼／彼女らの言動は、つまり文化的現象であり、それ自体を他者が評価することなど出来ないといえる（太田 2008）。

こうした政治文化の話に了解をえたうえで、筆者が示したいのは、この種の調査研究の向かう先である。彼／彼女らは、社会が求め、個人が望む手続きを踏んだうえで、つまり植民地遺産の消費を目指している。彼／彼女らは、過去におこなわれた写真の撮影、つまり生産を論じているが、それは写真の研究対象化、資源化を意図している。この点も、上記の引用文から明らかである。しかも、もしもこの調査研究が十全に生産過程のみを解明するものであったのならば、上記の引用文の議論は前半の論調のまま進み、後半の内容に転調することなどなかったはずだ。

この事例で顕著なとおり、モノの生産について論じることは、そのモノを消費することなのである。

4. ガラス乾板写真の市場消費

以上で提起したモノの消費という現象について、よりこの解釈を明らかにしていくため、別の事例も紹介しよう。同じく現代韓国で見られる、植民地期朝鮮のガラス乾板写真に関する事例である。

ソウルの名所、^{インサドン}仁寺洞の目抜き通りには、書芸用品店や古物商が立ち並び、店頭にたくさんの商品が置かれている。こうした店頭商品としてよく出品されているモノのひとつが、ハガキ大に印刷された植民地期朝鮮の風物写真だ (e.g. 写真4)。これらのうち大多数は、写真の表面に引っ掻き傷が入っていたり、端が欠けていたりしており、明らかにガラス板から転写したものと分かる。これらを店頭にならべていることについて、ある店主は述べた。

あの写真が売れても、商売にはならないんですよ。(中略)でも、あんなのは、もっていて損になることもないでしょう。盗んでいくヤツがいても、大きな損害にもならないですしね。(中略)それに、客寄せになるんです。(みた人が)面白いと思ったら、(店のなかに)入って来るんですよ。(中略)骨董品を好きな人でなくても、関心をもつ契機になるんです (FN20110224 2011年2月24日に採集した語りであることを示す。以下同様)

この店主は、植民地期朝鮮の風物写真が「関心をもつ契機になる」理由を、さらに写真がもつ特有の性質で説明した。要約すれば、写真はすぐに写真、「現実を写したもの」と分かるし、目に訴える力が強いので、他の商品(古道具、家具調度品、古書など)よりも、「素人ウケ」するのだという話だった。

ただ、この「盗まれても損にならない」商品には、別の特質もある。同じ店主は、写真の話を聴きに3度も店に立ち寄り、そのたび、長々と会話に付きあわせてしまった義理で何枚かの写真を買っていく筆者に、「そんなにあの写真が好きなんだったら」と、「次の段階に進む」ことを勧めた。転写した紙ではなく、原版を所有してみないかと、原版を保管している卸売商の倉庫を紹介してきたのである (FN20110304)。

同様のことは、別の店で前年にもあったため、筆者はその倉庫に行ったことがあった。そこは、同じ仁寺洞の雑居ビルのなかにあり、古物の買い取りも行っている場所だった。買い取りと卸売りを担当する商人は、「数十枚、数百枚という単位で売るので、何が写っているか、私は知りませ

せん」といいながら、次つぎにガラス乾板をみせてくれた (FN20100306)。後日、この倉庫を再訪し、話を聴きなおすと、「お客さん (= 筆者) は、決まったコースをたどって、ここに来たのですよ」といわれた (FN20110304)。つまり、目抜き通りの古物商の店先で写真に目を引かれた者は、店のなかに入って店主と会話することとなり、そのうちある程度の人びとは原版を物色するため、この倉庫へやってくるということである。

その「決まったコース」は、これで終わりではない。ガラス乾板というものを初めてみた客たちの大多数は、この商人に同じような質問をするこ



写真4 ソウルの古物商で取引される植民地期朝鮮の写真 (左手前) (2010年3月撮影)

とになる。どれくらい昔のものかが、客が商人にする代表的な質問だ。そのたび、商人は決まった答えをくり返すという。この商人の答えは、以下の2つの内容に整理できる。第1に、韓国のガラス乾板についての研究はほとんどないため、詳しいことは分からないという話⁽⁵⁾、そして第2に、1960年代まで経済が困窮し、写真用メディアを国内生産してもいなかった韓国では、写真フィルムが他国より高級品だったため、古いガラス乾板が先進諸国より比較的最近まで使われつづけたという話である⁽⁶⁾。

こうして古物商や卸売倉庫を訪ねるあいだ、筆者は何人かの常連客にも出会った。そのうち3人をとりあげて、彼らがガラス乾板を蒐集するようになった経緯を紹介しよう。

A (1968年生まれ・男性・会社員)とは、上述の倉庫で出会った。彼がここを訪れるのは、筆者に出会ったときが初めてのことで、やはり仁寺洞の目抜き通りの古物商で紹介されてきたとのことだった。彼は、上記と同じ質問と説明を商人と交わしたあと、その時は3枚のガラス乾板⁽⁷⁾を購入した。また、修理が必要な木製の小物入れにも興味を示し、修理が終わったら購入できるよう、予約していた。

このときAは、購入の動機を「ただの衝動買い」と表現していた (FN20110310)。ただ、それから2か月ほど経って話を聴いたさいには、購入したガラス乾板を自宅の「居間に飾ろうと思って、似合う額縁を探している」といっていた (FN20110508)。さらに2か月以上のあとに会ったときには、違った顛末を語ってくれた。額縁を買って飾って見たら、「知らない人の写真を家に飾るのは変でした。昔の写真なので、気持ちが悪い」ということになったそうだ。けっきょく彼は、予約した小物入れを受け取りに同じ倉庫へ行ったさい、人が写っていないガラス乾板を買い足し、それらを居間に飾っているとのことだった (FN20110718)。そして、さらに3か月を経て会ってみると、この室内装飾は本人が気に入り、家族や友人の反応も良かったため、その後も2度、同じ倉庫を訪れて、「面白いものが新しく入っていないか」、確認しているという。被写体が現在の韓国の風景とまるで違っているところと、ガラス乾板というものが現在の写真メディアと完全に異なるところが、「歴史と、人類の進化を証明している」と思い、ガラス乾板の蒐集に面白さを感じるようになったそうである (FN20111014)。

B (1976年生まれ・男性・会社員)は、上記とは別の古物商の店主が、かねてから「君(筆者)と同年くらいの客が最近よく来るから、友だちになればいい」といって紹介してくれた人物である。彼は、筆者と同じく偶然に仁寺洞の目抜き通りで見たことを契機として、紙に転写したガラス乾板の写真を蒐集するようになったとのことだった。「写真というより、近代に興味がある。(中略)なんだかロマンが感じられるから」といっていた。ガラス乾板そのものも同じ仁寺洞で売買されていることを古物商から聞いて知りながらも、「ガラスは割れるから」という理由で、原版は買わないということだった (FN20110717)。しかし、彼も自宅アパートを購入し、当分は引っ越し計画がなくなったとき、ガラス乾板を所有したくなり、一度に20枚以上も購入した。運動靴が入っていた空き箱に、かつて蒐集していた紙焼きの古い写真をコラージュして貼り付け、そこにガラス乾板をコレクションしていた (FN20111213)。ガラス乾板を蒐集する理由を、彼はこう語った。ガラス乾板は、「子どもを育てるために少ない小遣いでやりくりしている」ような「可哀想な中年男」でも出来る趣味だ、と。それにも関わらず、「昼食を買って食べるくらいのお金で」「壮大な歴史を自分の手につかむ」という「素敵な趣味」なのだ、と。

AとBの共通点として、彼らが収集しているガラス乾板が植民地期のものであろうと、旧大日本帝国の関係者が写したものであろうと、「関係ない」「関心ない」と、(少なくとも日本人である筆者には) 語るという点にもみられた。しかし、3人目として紹介するC (1973年生まれ・男性・会社

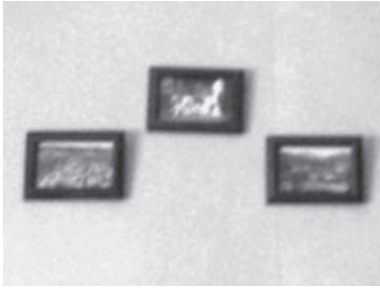


写真5 デジタルスキャンされ、印刷され、額縁に入れられて、アパートの寝室に飾られたガラス乾板（2006年9月撮影）

員）は、「日帝強占期⁽⁸⁾のモノを選んで、日帝強占期のモノだから、集めている」と言っていた。彼は、自分でも写真を撮るのを趣味とし、インターネット上で展開される写真撮影同好会の会員として10年ちかく活動してきたが、その過程で古い写真に興味をもったとのことだった。「ガラス乾板が売られているということを初めて聞いたとき、ほしいと思ったんだよ。（中略）歴史を忘れないために」（FN20110730）。では、彼はガラス乾板を蒐集しはじめる以前にも、「歴史を忘れないために」活動してきたのだろうか。「別に何もしていないよ。（中略）そんな自分が、ちょっと嫌いでもあった（中略）けど、正直、

僕たちの世代には手を付けにくいテーマじゃない？」（FN20111229）

彼ら3人に共通する点は、1つ目に、意図したものではなかったガラス版写真との出会いが、彼らを新たな行為へと動かしたということに集約できる。ガラス乾板はAの衝動をひき起こし、写真に関心がなかった近代好きのBの気を引き、植民地期のことに手を付けられなかったCの政治心性を行為へと発露させたのである。実は、これはソウル大学の研究チームにとっても、同じことだった。偶然に発見されたガラス乾板が、個々の研究者を研究チームに加入させ、その研究を動機づけした。それ以前に、ある者は、民俗学と博物館人類学を専攻していたが、植民地期朝鮮に関する研究をみずからおこなうことはなかったし、別の者は、旧日本の植民地主義と学術調査の関係を研究テーマとしてはいたが、写真を研究対象にしようとしたことはなかった。

2つ目に、彼らはみな、写真というモノ以上の、なんらかの意味と概念を、ガラス乾板に見出しているともいえる。Aの場合には、それが「気持ち悪い」という生理的な側面を含むものであったり、「歴史と人類の進化」という別の側面だったりする。Bにとっても、「壮大な歴史」であり、他の趣味と比べて「素敵」という価値が与えられている。Cにおいては、「これ（ガラス版写真）は、僕の（韓国人としての）正体性⁽⁹⁾を証明してくれるもの」という大義が語られる（FN20111229）。ただし、時にCは、自分が蒐集したガラス乾板を、「国に忠誠を果たせていなかった僕自身への免罪符」と静かにいい、ナショナリズムからより距離をとった表現もする。またCは、従軍慰安婦問題に関わるソウル市内でのデモに行ったが、その結果より明確になったこととして、こんなことを電話で語ってくれた。植民地期朝鮮で起きた問題に対して、自分はシュプレヒコールを挙げて団体行動をとるほどの「熾烈さ」をもっておらず、「ガラス乾板が自分に出来る限界」だし、それが「自分らしい、心の安らぐ、（過去問題についての行為の）レベル」なのだ、と（FN20121230）。こうした意味と概念による価値づけも、ソウル大学の研究チームの例にみられることと、共通しているといえるだろう。

5. レッスン2——モノのエージェンシー

こうした筆者の考え方には、異議も唱えられるだろう。

特に研究者に関しては、ここで紹介した事例で研究者が写真の資源化を目指すに至っただけで、その他の事例では写真資料の生産そのものを論じること十分に可能だという異議がありえる。だが、これから論説していくことの一部をあらかじめ述べておくと、こうした異議が、モノの生産と消費についての今日的な議論を反映しているとは、いいがたい。

まず、モノが生産された過程について論じることが、そのモノの履歴（biography）を明らかに

することである。モノにも人と同じく履歴があり、それがモノと人との違いを不明確にする点である (Gell 1998)。実際に、モノの生産過程を識るためには、人の履歴を調べるときと、まったく同じ質疑応答がおこなわれる。それをとおして、モノは商品化されるのである (Kopytoff 1986: 66)。

こうした、履歴を識る段階は、すでに述べたとおり蒐集者たちにもみられた。植民地期や、写真そのものにすら、それまで関心すらなかった人びとが、実物を見て履歴を識ることで、ガラス乾板に興味をもち、みずからそれらを選び好みするようになっていた。ここであらためて注目すべきは、ここで芽生えた関心や興味というものが、ただそれだけでいい尽くされる変化ではなかったということである。AもBもCも、ガラス乾板に意味と概念を附与し、他方では蒐集以外の行為をおこなうようになっていった。ガラス乾板を装飾することによるモノと話題とセンスの創造と共有、余暇生活とそのための工夫、政治運動への参加などが、本稿で示してきた例である。彼らは、商品を識り、選択し、その経験を重ねることによって、みずからの自己を表現し、それによる創造に加担するという、典型的な消費行動 (Schau and Muniz 2002) をおこなっているといえよう。

それだけではない。この自己とは、人格やアイデンティティという概念と併記しながら本稿で説明してきたとおり、社会的には人格やアイデンティティの陰に隠されたものであったが、モノが人に消費されるとき、人の自己は解放されるという研究結果まで出ている (Kozinets 2002)。少なくとも、モノの消費をとおして、人の自己は他者と疎通しあうようになる (Borgerson & Schroeder 2005)。つまり、生産行為により人がモノを創り出すのと同じく、消費行為によりモノは人を創り出す (Tilley 1999: 76; Fine 2002)。これゆえ、モノは人と同じくエージェンシー (agency) でありえるわけである。

こうしたモノのエージェンシーに関する議論は、特に過去 25 年、社会文化人類学の分野で活発に進んできた。一連の議論は、ストラザーン (Marilyn Strathern, 1941-)、ジェル (Alfred Gell, 1945-1997)、ラトゥール (Bruno Latour, 1947-) らによって先導されつつ、社会文化人類学の「オントロジー的転換」による「静かな革命」と呼ばれる。それが進むなか、人類の知の歴史に根差してきた人とモノ、主体と客体という単純な二元論は、うち崩されていった (春日 ed. 2011; Jensen & Morita 2012)。ここで読者は、「モノが人を創ることなんてありえず、モノとの出会いを契機に、人がみずから変わるだけではないか」と反論するかもしれない。しかし、こうした物体との出会いの契機という考え方も、物体そのものが契機であり、契機そのものが物体なのだという論証 (Strathern 1990) によって、すでに覆されてしまっている。

ただ、「静かな革命」と並行かつ同調しながらも、根本的な着眼点において袂をわかっている研究者たちもいる。たとえば、「静かな革命」の上掲した 3 旗手たちは、主として人びとが人以外の物体をとおして相互におこなっている概念化について明らかにしてきた。これと違っているのが、ミラー (Daniel Miller, 1954-) によって代表される研究者たちである。彼は、3 旗手たちと違って、物体そのもののマテリアリティやエージェンシーに着目してきたと、みずから語っている (Miller 2002)。

ミラー (Miller 1987) によれば、消費とは、人間が価値と意味を物象化し客体化して、コンフリクトとパラドックスを解消する過程である。ミラーがとなえるこうしたマテリアリティ論は、モノをめぐって人と人のあいだで起きる概念化ではなく、人とモノ、主体と客体のあいだで起きる相互作用を議論したものである。そこでは、モノは客体としてではなく、人と同じエージェンシーにまで格上げされている (e.g. Miller 1995)。

そして、こうしたモノのエージェンシーが発現するのは、けっして購入という一時点だけの話だ

けではないとされる。モノを所有しているということや、ときには所有していないということすらも、同じ議論であつかいうる。

物体は、人に所有されたり、身につけられたり、そしてもちろん欠けているという場合においても、(人の多彩な断片化された個々の内面要素より——引用註) さらに明確に人のアイデンティティを決定する (Borgerson 2005: 440)

ここで人のアイデンティティを決定するということは、その承認の必要十分要件であるその人の人格と自己とに変化を促すことを意味している。

本章に記述してきた A、B、C という消費者たち、そしてソウル大学の研究者や新説を唱えた研究者さえも、モノとめぐり遭い、モノの近くにいることによって、モノに創られている。そこには、たとえば、A や C や新説の研究者の場合のように他の人も関わるが、B のようにひとりでモノと相互作用することもありえる。こうした事例の詳細な分析は、前節までで記述してきたことなので、ここにくり返しておこなうまでもないだろう。これらの事例によっても、植民地期の朝鮮で撮られた写真は、たしかに現代韓国においては消費物となるだけではなく、逆に人びとを創るエージェンシーでもあるといえるのである。

6. レッスン3——物体化されない変数、あるいはモノを拒絶する意思

レッスン2は、先行研究の追従の形をとった。しかし、本稿であげてきた一連の写真をめぐる聴き取り調査のなか、本稿の事例には上記のようなオントロジーと不調和な部分も発見された。

第1に、ミラーは消費がコンフリクトとパラドックスを解消することに着眼してきたが、現代韓国におけるガラス乾板の消費において、そこまでの現象はみられなかった。むしろ、脱植民地的な現代韓国の人びとの、植民地期に寄せる否定的な感情を、植民地期朝鮮の写真の消費は解消しておらず、自己の解放とまではいえないような状況まで確認された。

この理由はいくつか考えられる。たんに、ミラーやそれを援用してきた研究者たちの研究対象(たとえば、ロンドン市の北部地域におけるデニム生地消費)と、現代韓国におけるガラス乾板とが、議論の地平を共にしていないからという理由も、ありえるだろう。あるいは、「コンフリクト」「パラドックス」「解消」ということばたちがもつ劇的なニュアンスに、現代韓国の平凡な現実について行っていないからかもしれない。この後者の想いを、現地調査をつうじて、筆者は感じつづけていた。

第2に、先行研究のようなマテリアリティ論を韓国・朝鮮研究に節合 (articulation) させるためには、なんらかの補助的なアプローチや理論が必要だということが分かった。既存の議論をそのまま当てはめるのは、むしろ現実的でないことということである。

近年にストラザーンは、日本の人類学者たちが「オントロジー的転換」から積極的に影響を受けていることについて、共感の意を表明している。彼女は、欧米人ではない人類学者たちが、(彼女自身が研究地域とする)メラネシアではない研究地域について、彼女らのオントロジーを援用することに成功したことを、称賛している。彼女らが目指してきたオントロジーは、文化の地域差に左右されないはずであり、こうした他地域の研究者たちが他地域についても追従できてこそ、「それぞれオントロジー」だからである (Strathern 2012)。

ただ、韓国・朝鮮では、モノたちが置かれた根本的位相に独特の点があり、それはこの地域の社

会文化の根底的で核心的な部分にまで通じている。特有の「性理学」的な土壌である。人はもちろん、モノも「理」⁽¹⁰⁾に即して動くべきだという信念が深く根ざしたこの地域では、社会文化全体が、高度に人間の知を中心に回らざるをえない。また、現地の人びとのなかには、みずから主体であろうという意識が高く、よって他者を客体化しようという意識も強い (see also 太田 2003)。このため、「世に客体はない、主体のみぞ存在する」という考え方は、他の地域では無意識のうちに社会文化の底辺に存在しているにしても、この地域では無意識のうちに拒否され、抑圧され、隠ぺいされて、しかるべきに思われる。そこでは、モノによって人が創られるということなど、「正しい」とも、「善い」とも、「美しい」とも認識されにくい。逆にいえば、韓国・朝鮮の社会文化では、モノのエージェンシーやマテリアリティが発現しないように、長い歴史をとおして人びとが、それは「誤っている」「悪い」「醜い」と叫び続けてきたかのような背景があるということである。そもそも、人間中心的な「西洋」の近代的な思想に対し、「東洋」の思想は自然共存的であるかのようにいわれる古い知識社会の言説があるが、仏教や道教や神道とは違うものをより強力な精神的よりどころとし、今日でもそれを土壌として有する韓国・朝鮮は、その外側にいる研究者が典型的にもっているこうした「東洋」認識と、大きく違った姿をしているものである。

第1の点は、第2の点を理由として、筆者の現地調査中に発現したことなのかもしれない。ここで筆者は、粗く短い1本の試論を終える。だが、これで先行研究のオントロジーを批判したいのではない。韓国・朝鮮を研究する立場からそれらに向きあうためには、他の地域の場合とは違う、何らかの補助的なアプローチや理論が必要となってくるということを示しておき、次の試論からそれを組み上げはじめたいのである。

注

- (1) 筆者は当時この学科の大学院生だった。このため、この資料や展示の経緯や状況について随時、かつ直接的に見聞きし、その一部は自身の日記帳にも記録していた。匿名でしか感謝は述べられないが、関係各位に深くお礼を述べたい。また、本稿の後半に登場する聴き取り調査については、神奈川大学国際常民文化研究機構の共同研究(2009~2012年度)によりおこなった。ここにこれらを併記し、謝辞に代えたい。
- (2) この誤解は、韓国ではもちろんのこと、日本の出版物にも及び、この話のとおりの撮影年代のまま日本語でも記載されてしまった例が、いくつみられる。たとえば、筆者自身も、この写真を書き物に借用し、懐疑的表現ながら「1930年前後の蔚山(ウルサン)中心街と推測されている写真」と表記したことがある(土田ほか2010:100)。
- (3) これらの写真とその生産については、同研究所の研究者たちを中心に、長年にわたる検証がくり返されてきた(e.g. 浜田 2005)。
- (4) 個人をこうした人格と自己の二元論と、それによって把握してきた社会文化人類学の研究史については、(中川 2001)に詳しい。
- (5) 実際に、韓国の写真史に関しては、主として被写体の歴史をあつかった単行本(崔仁辰^{チインヂン} 1999)こそ、ライターの手によって刊行されているものの、それも含めてメディア別の細かい時代考証はほとんどされていないことが確認できる。
- (6) ガラス乾板は、再利用が可能な写真メディアである。よって、流通商品がフィルムに置き換わった後も、それ用のカメラを所有している人びとの手でリサイクルされ、韓国では1960年代の写真館ですら使われ続けたという。以上は、韓国・成均館^{ソンギョングワン}大学博物館の学芸員たちからの教示による。
- (7) この3つとは、すべてハガキ大の写真で、被写体の内訳は、子どもたちが遠巻きに並んで写っている街中の風景写真1点と、にぎわう商店街を写した写真2点だった。これらを選んだ理由をAは、「家族写真みたいな(人の顔が明確に判断できる)ものだと、もっていて怖い気がするけれども、人がまったく写っていないと、面白くないから」と説明した(FN20110310)。
- (8) 「日帝強占期」というのは、韓国において「日本植民地期」ということばのよりナショナリスティックな表現で、C自身もそういう意味で使っているという(FN20110730)。

- (9) 「正体性」とは、「アイデンティティ」の韓国語訳である。しかし、そのニュアンスは多国語のものとは違い、「その人の正体、つまり内面の奥深くに隠れている本当の姿」だととらえられている傾向が韓国では強い（太田心平 2012）。
- (10) 哲学者の解説は他の論考で参照されたい。ここでは、その一側面を本稿に関わるいい方で説明するが、その場合の理とは、知識社会の上部構造が定め判断することで、韓国社会に統合され維持されてきた概念と価値に対し、個別の事象や行為が即しているか、どうか、そしてその透明性が保障されているかという、つまりローカルなソーシャル・アカウンタビリティの一種である。

参考文献

【日本語】

太田心平

- 2002 「韓国キリスト教労働運動の多面性——教会構成員の組織内アイデンティティと権威の問題から」, 韓国・朝鮮文化研究会（編）『韓国朝鮮の文化と社会』1, 風響社: 129-168.
- 2003 「過去を養う——清溪川とソウルの寄せ場から」, 韓国・朝鮮文化研究会（編）『韓国朝鮮の文化と社会』2, 風響社: 73-91.
- 2008 「反日感情——国史認識とその相互作用」, 春日直樹（編）『人類学で世界をみる』, ミネルヴァ書房: 169-184.

春日直樹（ed.）

- 2011 『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』, 世界思想社.

土田半四郎・永樂陽一・黒田益代・小林繁樹・八杉佳穂・太田心平

- 2010 「第 371 回みんぱくゼミナール——千家十職の家を継ぐ」, 国立民族学博物館, 特別展「千家十職 × みんぱく 茶の湯のものづくりと世界のわざ」実行委員会（編）『国立民族学博物館特別展「千家十職 × みんぱく」を解剖する』, 特別展「千家十職 × みんぱく 茶の湯のものづくりと世界のわざ」実行委員会: 92-107.

中川理

- 2001 「人類学研究における人格と自己」, 『年報人間科学』22: 192-208.

浜田弘明

- 2005 「「渋沢フィルム」の景観分析とその課題——朝鮮半島多島海を事例として」, 『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』2: 74-93.

【English】

Borgerson, Janet

- 2005 "Materiality, Agency, and the Constitution of Consuming Subjects: Insights for Consumer Research," *Advances in Consumer Research*, 32: 439-443.

Borgerson, Janet & Jonathan E. Schroeder

- 2005 "Identity in Marketing Communications: An Ethics of Visual Representation," in *Marketing Communication: Emerging Trends and Developments*, ed. Allan J. Kimmel, Oxford: Oxford University Press.

Fine, Ben

- 2002 *The World of Consumption: The Material and Cultural Revisited*, Oxon, OX & New York: Routledge.

Gell, Alfred

- 1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Oxford: Clarendon Press.

Jensen, Casper B. & Atsuro Morita

- 2012 "Anthropology as critique of reality: A Japanese turn," *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 2(2): 358-370.

Kopytoff, Igor

- 1986 "The Cultural Biography of Things: Commoditization as a Process," in (ed.) Arjun Appadurai (ed.) *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, Cambridge & New York: Cambridge University Press: 64-91.

Kozinets, Robert V.

- 2002 "Can Consumers escape from the Market?: Emancipatory Illuminations from Burning Man," *Journal of Consumer Research* 29: 20-39.

- Miller, Daniel
 1987 *Material Culture and Mass Consumption*, Oxford: Berg.
 1995 *Acknowledging Consumption*, London and New York: Routledge.
 2002 "Should Objects Be Called Agents?," working paper, Department of Anthropology, University College London.
- Morphy, Howard & Marcus Banks
 1997 "Introduction," in M. Banks & H. Morphy (eds.) *Rethinking Visual Anthropology*, New Haven & London: Yale University Press.
- Schau and Muniz
 2002 "Brand Communities and Personal Identities: Negotiations in Cyberspace," *Advances in Consumer Research* 29: 344-349.
- Strathern, Marilyn
 1990 "Artefacts of History: Events and the Interpretation of Images," in Jukka Siikala (ed.), *Culture and History in the Pacific*, The Finnish Anthropological Society: 25-44.
 2012 "A Comment on "the Ontological Turn" in Japanese Anthropology," *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 2(2): 402-405.
- Tilley, Christopher
 1999 *Metaphor and Material Culture*, Maiden, MA: Blackwell.
- 【韓国語】
 姜正遠 (Kang, Jōng Wōn)
 2008 "유리건판의 내용과 가치 (ガラス乾板の内容と価値),"李文雄 et.al. (eds.) 『서울대학교박물관 소장 식민지시기 유리건판 (ソウル大学博物館所蔵 植民地期ガラス乾板)』, Seoul: 서울대학교출판부 (ソウル大学出版部): 14-22.
- 申衡錫 (Shin, Hyōng Sōk)
 2010 "태화루 (太和樓) 에 설치된 울산 최초의 도서관 (太和樓に設置された蔚山最初の図書館)," 『蔚山文化研究』 3: 80-95.
- 太田心平 (Ota, Shimpei)
 2012 "연구자가 찾아왔다: 시점의 전환과 지식의 재귀성에 관한 메모 (研究者がやって来た——視点の転換と知識の再帰性に関するメモ)," 朝倉敏夫・太田心平 (eds.) 『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리 (韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声)』, Seoul: 學研文化社: 315-339.
- 李文雄 (Lee, Mun Ung)
 2008 "일본 인류학자의 시선으로 본 1930 년대 한국사회 (日本の人類学者の視線でみた 1930 年代の韓国社会),"李文雄 et.al. (eds.) 『서울대학교박물관 소장 식민지시기 유리건판 (소울大学博物館所蔵 植民地期ガラス乾板)』, Seoul: 서울대학교출판부 (소울大学出版部): 1-13.
- 崔仁辰 (Choi, In Jin)
 1999 『韓國寫眞史 1631-1945』, Seoul: 눈빛 (ヌンビッ).